JAELE Newsletter
上越英語教育学会通信
The Joetsu Association of English Language Education
July 2010 No. 3

耕す。

清泉女学院短期大学 准教授　中村洋一
（平成 4 年度修了生）

縁あって、昨年の春から、棚田で有名な姥捨というところにある小さな畑を耕している。最寄りの JR 篠ノ井線姨捨駅は、急勾配のため、スイッチ･バックになっていて、休日になるとたくさんのカメラが並ぶ所でもある。昨年、9 年間お世話になった水戸の職場を辞し、長野の自宅から通える職場に移った。それを期に、weekend farmer を始めた、というわけだ。その畑は 10 年以上も荒らされて、山林に戻りかけた限界耕地だった。

開墾作業の開始に備え、草刈り機ビーバーに始まり、今までの人生ではまったく無縁だった農作業用の道具をたくさん揃えた。軽トラックに乗るようになり、その便利さに目を見張った。今は、自宅から片道 40 キロの職場まで、ETC 搭載の軽トラックで高速通勤している。近所のおじさんが使わなくなったというマメトラを譲ってもらった。鍬、つるはし、スコップ、三つ叉、さでかぎ…一応のものは揃っている。

開墾作業の第一ステップ草刈りは、時間とエネルギーを要したけれど、満足のいく成果だった。ビーバーの刃を 3 枚代えた。鬱蒼としていたジャングルに陽が差し、輝く未来が見えたような気がした。ちょうど草刈りが終わりかけていた時、知り合いのおじさんが偶然通りかかり、「おぉ、きれいになったなあ。あれぇ?だけど、今刈ってるのは、隣の家の畑だな…。おたくのは、もう一枚下だ。」手元に届いた地図では境界が分からないほど、周りの畑は荒れていて、ほとんどが耕作放棄農地なのである。「次は、蔓の根っこを取らなくちゃなぁ。そのマメトラかい…。それじゃ無理じゃねぇかなぁ。まぁ、くれぐれもケガしないように。」と、おじさんは、かなり冷ややかに、我がマメトラを横目で見ていた。

10 年も鍬が入っていない土はとんでもなく固くなっていた。そこに信じられないくらいの草の根がある。さらに、30 センチ掘ってもまだ先端が見えそうもない蔓の根が、無尽蔵にある。こんなもん、マメトラで全部かき回しちゃぇと思った。闘うまでもなく、一気に負かしてしまえ、と

思った。しかし、わがマメトラは 1 メートルも進まないうちに、土を起こす小さなロータリーに夥しい蔓が強固に巻き付き、動かなくなった。絡まった蔓を外し、アクセル全開で強くマメトラを押してやると、今度は、エンジンベルトが切れた。ベルトを代えて、固い土にロータリーを降ろすと、キックバックを起こし、マメトラが自分の方に突進してきて、危うくケガしそうになった。本来であれば、大きなバック･ホーのような重装備の機械で、それこそ、根こそぎ、有無を言わさないパワーで処理すべき作業であるらしかった。開墾開始から早 2 ヶ月、ここで、土起こしは頓挫した。そして、なんとはなしに畑から足が遠のき、2 週間後に、恐る恐る見に行ってみたら、案の定、草刈り前のジャングル状態に、みごとに戻ってしまっていた。完全にやる気は消え、1 年目の短い開墾の闘いはあっけなく終了した。

昨年の教訓から、今年は、畑と「争う」ことは極力止めようと思った。丁寧に、辛抱強く草を刈り、蔓の根っこをひとつずつ掘り起こし、そして土起こし。マメトラでは力がなく、一気に土を起こすのはダメだと昨年学んだ。そこで、1 センチぐらいずつだんだんに深く起こして行く作戦を取った。はじめはひっかき傷程度、次に薄皮一枚剥ぐ程度…。だから、時間がかかる。大きな耕耘機だったら 2～3 往復で済みそうな所を、何度も何度も、お百度参りのように行ったり来たりして耕し続けた。右隣の畑のおじいさんとおばあさんが、「マメトラじゃダメだと思っていたけど、たいしたもんだなぁ。畑になってきましたなぁ。」と笑顔で褒めてくれた。ありがとう、おじいさん、おばあさん。マメトラだって、やる時はやるんです。

この畑の開墾作業で、少しずつ続けてやることの重要さをあらためて感じている。業者に頼んで、重機を入れてやってもらえば、もっと早くに、もっと良い状態になったのかもしれない。しかし、10 年かかって荒れた土地は、10 年かかって元通りにした方が良いのかもしれない。愚鈍なほど気長に、着実に。

今現在、ほぼ開墾を終了した畑には、なんの種も蒔いていない。冷ややかなおじさんが、「2～3 年は耕すだけにして、雑草の種が少なくなるまで待った方が良い」と教えてくれたからだ。冷ややかなおじさんの意見がわりと正しいことは昨年学んだ。週末、時間ができると、軽トラックにマメトラを乗せ、なんの収穫の予定もない畑を耕す。外から見ると、馬鹿に見えるかもしれない。虚しくないかい、と聞かれそうな気もする。しかし、来るたびに土の状態を見ていると、なんだか、これでいいような気もしてくる。初めマメトラに突っかかって、キックバックを起こして反抗し、荒れて、怒っていた土が、最近は、なんだか喜んでいるように見える。新鮮な空気が土の中に入って、ふかふかと気持ちよさそうに見える。もしかしたら、ちょっと精神が危ない状態になってしまったのか…。

長野の高校で 20 年、水戸で 9 年、また長野に戻って 2 年目。今年は、仕事を始めて 31 年目になった。「これまで」のほうが「これから」よりもずっと長い年齢になった。上越教育大学在学中

に誕生した長男が 18 才になった。今、少しは振り返っても良い時なのかも知れないと思っている。

学部のゼミで出会った英語のテストにこだわり続けて来た。「テストで言語能力は測れるか」という疑問を投げかけてきた。少しだけ、コンピュータ適応型テスト開発のお手伝いをしてきた。しかし、英語のテストを取り巻く課題は、まだまだ未解決のまま山積している。ワークショップで何度話しても、会場を出て階段を降り始める辺りから「でもさぁ、やっぱりテストなんてねぇ…」と振り出しに戻るのが聞こえてきて、肩を落としたことも、何回かある。

しかし、やはり、愚鈍なほど気長に、着実に続けて行くしかないような気もする。種を蒔くに至らなくても、耕して、耕して、草を刈って耕す、そういう単調な作業を繰り返していくしかないような気もする。言語テストにおける未消化の課題と併せて、日本人英語学習者のための Can-Do Statements 確立、Standard Setting の理論構築と統計処理技術の開発、item banking の充実といった新しい課題に対峙するときも、まずは、「愚鈍なほど気長に、着実に」ではないかと思う。相対的に短くなった「これから」の時間の中でも、続けていけば何かが出来るかも知れない。さぁ、もう一踏ん張り、だ。

まずは、もう一度、山の畑を耕しに行こう。

〔編集者より〕

中村洋一氏　略歴：長野県の県立高等学校教諭、常磐大学准教授を経て、現職。日本言語テスト学会(JLTA)事務局長兼理事。県立高校在職中、大学院進学のために定時制への異動を希望し、夜間、教鞭をとる傍ら長野県から上越教育大学大学院へ通学。過酷な状況下で、最も早く研究テーマを設定し、最速で修士論文を書き上げた逸話は知る人ぞ知る。大学院修了時には上越英語教育学会の前身である上越教育大学英語教育学会の設立に尽力した。在学中から、院生室の IT 関連アドヴァイザーであり、編集者を含め、助けられた者の数多し。テスティング、項目応答理論の中村として知られる。著書に「テストで言語能力は測れるか～言語テストデータ分析入門～」（桐原書店：大友賢二監修/中村洋一著）（絶版）がある。

キビタキ（スズメ目 ヒタキ科）

How are you?　I'm fine!

福岡県糟屋郡宇美町立原田小学校
大田　亜紀
a_k_i_s_mail@yahoo.co.jp
（平成 20 年度修了生）

「 Good morning! 」
朝一番、力いっぱい元気な声で教室に入っていく私。そんな私に負けまいと、
「 Good morning! 」と元気な子供たちの声がかえってきます。今年度は 3 年生の担任となりました。小さな可愛いわんぱくキッズ 28 名が、我がクラスです。

大学院を修了し、現場に戻ってから２年目。現場モードにすっかりギアチェンジし、酸欠状態を感じながらの毎日を過ごしています。今回上越教育学会の Newsletter のお話を頂き、ちょっと院生活を懐かしみながら私の近況報告を兼ね、日々思うことを綴りたいと思います。

本年度は研究主任としての役をいただきました。実は、本校は文部科学省から外国語活動の研究開発校に指定されております。現場ではいまだに担任が主となって授業を進めることさえできていない状態の学校が多く、本校も昨年度まではそれに近い状態でした。外国語活動の目標や内容さえ理解できていない、というかそのような研修の場さえないというのが現状です。一部の、しかも数時間の研修では、２３年度からの実施はいまだ厳しいといえるでしょう。本校では、今年度全員が一回、検証（公開）授業を行います。外国語活動の指導案をゼロの状態からつくります。新任も超ベテランも同じようにして頂いています。実際に授業をしてみて、授業案を作成してみて、自分の中に「はてな」が生まれ、その答えを先生方は一生懸命探っています。全員の指導案の指導、また授業づくりの支援、全体での研修運営などすべてを任され、恐ろしいスケジュールで毎日が過ぎます。しかし、先生方が一生懸命外国語活動の授業について討議されている姿や、子供たちと担任だからこそできる授業をされている授業を参観した時、その支援の大変さも忘れてしまいます。授業のイメージがつかめ、ねらいが明確につかめた先生方は、どんどんアイデアをだし、授業を進めています。ちょっとずつの歩みですが、その一歩を大切に、職員協働で頑張っているところです。

来年度は研究発表会（１０月か１１月頃）を開催いたします。全体講師は、文科省の直山木綿子先生にお願いしています。福岡は遠いですが、もしお時間など都合がつきましたら、是非是非ご来校頂き、ご指導いただければ嬉しく思います。

さて、話は変わりますが、先日ある中学校の英語科授業の参観をしてきました。小学校では外国語活動をかなり経験した子供たちの中学校での授業ということで、大変興味深く参観したところです。

私の今の関心事の一つは、「中学校英語科の授業の変容とは何か？」ということです。授業を参観し、私には何がどう違うのだろう？と思うことの方が多い授業内容でした。子供達はほとんど英語を発しない、先生と一問一答ばかり、内容に対する動機付けも低い、子供たちの目が生き生

きしていない・・・などなど。あまり中学校の授業を見る機会がないので、それは普通だったのかもしれませんが。

小学校で外国語活動が始まり、それを受ける中学校の英語科の先生方のご苦労を察すると大変頭が下がります。きっと日々悩まれている中での実践だろうと思います。先日、昭和女子大学付属昭和小学校の小泉清裕先生とお話しする機会があり、「中学校教師の意識改革が必要だ」とおっしゃっていました。まず自己否定するところから始めなくてはならない、と。まずは小学校の外国語活動を十分に理解していただくことなのだろうなと私は感じています。そうは言ってもそんな時間さえない・・・というのも現実問題かもしれません。「こう変えたよ」というような授業を、今とても見たいと思っています。どなたか情報下さいませ。

昨年度は、大きな研究大会で２回も発表の機会を頂きました。どちらも大変自分自身勉強になりました。会場では、全国にいる上越の仲間がいます。なんだかとっても不思議な安心感をもらえます。きっとこれからもこのようにして会う機会があるんだなって、ミニ同窓会みたいでわくわくします。心強いですね。そして、私の携帯電話のアドレス帳には、上越での仲間が今でもいっぱいそのままに残っています。誰かにメールをしたり、電話をしたりする時、ふと目に入ってきます。

「どうしているのかな？」

「同じように忙しさの中で、頑張っているだろうな…」

一瞬、思いがよぎります。みんなの頑張りを想像し、自分も頑張らなくちゃ！と思います。

２８人の可愛い子供達を目の前にし、よーし、今日も頑張るぞ！・・・と。

「 Good morning! 」　今日もいい一日にしようね。

また皆さんとお会いできる日を楽しみにしています。

そろそろ梅雨入りの福岡から。

ノゴマ（スズメ目ツグミ科）

大学院生としての 15 ヶ月間

大学院２年　言語系コース（英語）
山岸由利江

県内の中学校現職として在学し、久しぶりに授業を受ける側の緊張感も体験しながら大学院で学んでいます。授業等で夜遅くまで学んでいる学生が多く、その意欲に感心し、また様々な背景を持った仲間から刺激をもらいながらの充実した院生生活です。先生方からは、現場で研修する内容とは異なった視点から学ぶ機会を与えていただき、おかげ様で私にとっては全てが新しくチャレンジすることが必要な授業ばかりです。興味深い先生方のご指導が、自分が取り組もうとする研究の方向性を決めるヒントとなりました。

中学校の現場では生徒たちに教えながら、授業の展開や教材などに多くの疑問を感じていました。わずか週に２、３時間の授業で効率的に英語の力を伸ばす方法は何か、日本人同士のコミュニケーション活動で話す力がつくのか、こんなにスピーキング活動に時間を割いても楽しいだけの活動に終わってしまっているのではないか、最近教えたばかりの文法だがもう忘れているのは何故か…等､様々な疑問のうち１５ヶ月の間に解消された疑問がわずかですがありました。また、特に専攻する英語教育分野においては自分が分からないことは何か、不足していた点は何かが明らかになってきました。それと同時に課題も増え、来年の春以降どの点から授業の改善を行うべきか迷うほどです。この２年間は研究を深めたり新しい知識を身に付けたりすることのできる恵まれた期間です。しかし、長距離通学のために控えめな時間割を組んでしまったことが院生生活唯一（？）の後悔です。残された期間も有意義なものとなるような工夫をしていきたいと思っています。

「使える男になって・・・」

大学院１年　言語系コース（英語）
矢嶋隆之

私は，新潟県の教員として採用されてから，１０年目の小学校の現職です。現場にいたころは，若手ということもあり，専門ではないのですが，体育に懸命に取り組んできました。そんな中，職場を見渡してみると，さまざまな分野ですばらしい専門性を身に付けている先輩や同僚がいました。いろいろなことを教えてもらうと同時に，多くの刺激をもらいました。次第に「自分も後輩を指導できるような専門性を身に付けたい」と強く思うようになりました。

そこで，自分が選んだのが上越教育大学で小学校外国語活動について学ぶ道です。私は，決して英語が得意なわけではありません。でも，好きなのです。ちょっと無謀な気もしましたが，好きということは，きっとこれから学び続ける大きな原動力になると思いました。そして，今の環境に思い切って飛び込んでみたのです。

今から１０年ほど前，大学を卒業するときに，私は，大学院に行ってみようかなと考えたこともありました。でもその時は，何を学びたいのかがはっきりしていませんでした。でも，今は違

います。明確な目標があり，毎日が充実しています。英語コースで学ぶ仲間や先生方から，本当によい刺激を毎日受けています。

今年の３月，前任校を離任するときに，「今よりももっと使える男になって，現場に戻ってきます。」と宣言してきました。教師として，自分も学び続ける姿勢を子どもたちに見せたいなあと思っています。しっかりと学んで「使える男」になって現場に戻れるように頑張っています。

校長の眼～つぶやき･うたかた～

連載　第３回

苫小牧市立啓明中学校
校長　佐々木郁夫
（平成４年度修了生）

「疾風に頸草を知る」

「疾風（しっぷう）に頸草（けいそう）を知る」という言葉があります。疾風（しっぷう）は激しい風であり、頸草（けいそう）は強い草のことです。激しい風が吹くと、弱い草は倒れて強い草だけが残るように、その人の真価は、ピンチになってそれを乗り越えるというような局面に遭遇してみないと分からないという意味です。逆境に出会って初めてその力、真価が分かるということです。

私はちょうど 10 年前、有珠山噴火のとき、北海道教育庁胆振教育局に勤務していました。噴火が平成 12 年 3 月 31 日で、当時虻田町に住んでいた人たちは町外へ全員避難をしました。町役場や教育委員会も隣の豊浦町に引っ越していました。私は 4 月に入り、火山灰の降る中、特別通行許可証をもらって、生涯学習課長、教職員人事係長、学校教育係長と一緒に避難先である豊浦まで遠回りして行きました。その目的は避難中の小中学生の安否を確認したり、新学期が始まっているのに、校舎がない中で、一刻も早く学校を再開できるよう町教委や校長先生たちと話し合うためでした。住む家を失い、避難所で生活する校長先生たちの表情は疲労が色濃く出ており、途方に暮れている様子が分かりました。確かに誰も経験したことのないことが現実に発生しているのです。校舎はない、児童生徒の所在が正確にわからない、自分たちの住む場所も避難所でしたから、平気な顔でいられるはずがありません。それでも 4 月 17 日に学校を再開することができました。このとき、旧虻田町の 4 小中学校の校長先生たちと先生たちは懸命に児童生徒の所在確認や、避難所にいる子どもたちを激励するなど献身的な努力をしていました。私は 4 月、10 回にわたって現地を訪問し、学校再開に向けた準備と再開後の実態を把握して道教委等へ報告するため、いろいろな要望を聞いたり、困っていること、緊急に対処すべきことなどを先生たちから教えてもらいました。

この未曾有（みぞう）ともいえる有珠山噴火後、学校を再開させるに当たって道教委は思い切った措置をとりました。校舎を使えない四つの小中学校児童生徒を豊浦小中と長万部小中の校舎を使って学習させるということでした。児童生徒は避難場所に近いところで学習することになり、先生たち

も分かれて勤務することになりました。詳しい説明は省きますが、かなり変則的でしたが子どもたちを速やかに学校生活に戻してあげることができました。非常事態でしたので私だけでなく、多くの人たちが昼夜の区別なく被災からの復旧を願って必死に仕事をしていました。今思うと精神的にも体力的にも極限に近く消耗していたことがつい昨日の出来事のように感じられます。

そのような厳しい状況の中であっても、私たちを陣頭指揮していた０課長（現在道教委学校教育局長）は常に前向きな姿勢を崩すことなく、どうすれば子どもたちが安心して学校に戻り、学習することができるかを最優先していました。究極の大ピンチの中であっても、この０課長は持ち前の体力と気力をいかんなく発揮し、泣き言の類や愚痴めいたことは一言も言わず、目指す方向へ私たちを引っ張ってくれました。仕事が錯綜し、次から次へと山のように押し寄せてくる様々な難題を逃げることなく、手際よく片付けていく姿は頼もしく、周囲にいる者に絶対的な安心感を与えました。疲れてくると不機嫌になったり、食事もきちんと摂らなくなりがちですが、この人はお昼になったら「さあ昼だ。食べよう」夜は「まず、食べよう」と言って、自ら正午過ぎ、六時ころに食事を摂っていました。陣頭指揮をする人が、率先垂範して元気を出している姿を示すことによって、私たちはやる気になり、不平や不満は出るはずもありませんでした。

まさに、「疾風に頸草を知る」を見た思いがします。世の中には逆境に立ち向かうこともせず、どうせ自分はできない、ダメとあきらめる人がいます。利害や打算だけで冷たい人、あるいは、何か自分に不都合なことや面倒なことがあるとすべてを他人のせいにして逃げる人、自分の主張はあくまでも通そうとするが、人の意見には聞く耳を持たない人、義務を果たしていないのに権利だけを要求する人など、情けない恥ずかしい人がたくさんいます。

私は、沼中の生徒全員が疾風に頸草を知る人になってほしいと願います。ピンチは次に来るチャンスを意味しています。困った時、苦しい時、泣きたい時、逃げ出したくなる時、あなたの真価はその時に問われます。しかるべき立場にある人が言い逃れをしたり、潔さを捨て去り、不正や偽装、責任回避を平気でしています。また、目を覆いたくなる凶悪犯罪がはびこる世の中であれば、なおさら頑（かたく）なに正しく潔い人でありたいです。たとえ愚直と冷笑を浴びても、迷わずまっとうな生き方を選びたいです。

〔編集者より〕

佐々木郁夫氏は今年４月の人事異動で苫小牧市立啓明中学校長に着任されました。本稿は前任の苫小牧市立沼ノ端中学校生徒会誌巻頭言（平成２２年３月発行）に一部加筆修正したものです。なお、本文中の０課長は定年前に退職され、４月から旭川市内の高校長に転身されたとのことです。

原稿の募集

JAELEN は上越英語教育学会会員の皆様に楽しく読んでいただける通信であることを心がけて編集しています。皆様からお寄せいただくエッセイの内容も英語教育関係にこだわらず、近況報告、教育論から書評に至るまで種類を限定せず掲載させていただきます。皆様の原稿を随時、募集いたしておりますので、ぜひ、原稿をお寄せいただければと思います。また、知り合いの修了生の方で JAELEN の存在を知らない方には、ぜひ本号を転送してあげてください。JAELEN を読んで上越時代を懐かしんでいただきたい、先輩、同級生、後輩の近況を知っていただきたい、それが編集部の願いです。もちろん、現役の院生の皆さんの投稿も大歓迎です。ぜひ、JAELEN 編集部（北條、野地、飯島 e-mail:francisiijima@yahoo.co.jp）までご連絡ください。

編集後記

皆様のご協力をいただき、JAELEN 第 3 号の発行にこぎつけました。日本のあちこちからメール添付で送られてくる原稿を読んでいますと、皆様がそれぞれの職場で大変忙しい日々を送っている様子、研究発表を颯爽と行っている様子、院生室で研究に打ち込んでいる様子が目に浮かんできます。JAELEN の編集作業に関わることで、英語教育、研究に打ち込んでいる皆様の姿を思い浮かべ、私自身も英語教師として、また英語教育研究者として身が引き締まる思いがいたします。多忙な日々の中、心を込めた文章を書いていただきありがとうございました。上越英語教育学会でお目にかかる日を楽しみにしています。　　JAELEN 編集委員会

2010 年 7 月 1 日発行

発行者　上越英語教育学会

JAELEN 編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）

栗木健二（上越教育大学大学院 1 年）